



【戦後日本デザインの軌跡展】展示風景

# 戦後日本デザインの軌跡 1953-2005

—千葉からの挑戦

## Topics

- 特集 戦後日本デザインの軌跡 1953-2005 —千葉からの挑戦
- 連載 ボランティア日和
- 予告 海に生きる・海を描く ～応挙、北斎から杉本博司まで～  
今年度の展覧会スケジュール



## 新しい年度の新しい試み

美しく華やかな桜の花とともに、また新しい年度が始まりました。

とくに平成 18 (2006) 年度は、美術館にとって新しい制度のもとでの第一年度となり、大きな模様替えがなされます。千葉市が「公の施設の管理運営」に関して「指定管理者制度」を導入することを決定し、昨年 10 月に公募する運びとなりましたが、当館については、厳重な審査の結果、従来通り千葉市教育振興財団が指定管理者に決定されました。人員の配置をよりスリム化し、サービスの向上を図って、ますます多様化する市民のご期待とご要望に対して、より効果的、より効率的に対応すべく努めて参る所存です。いっそうのご理解とご支援をよろしくお願い申し上げます。

新たな取り組みとしましては、従来毎週月曜日を休館としてきましたが、月曜（第一月曜日を除く）も開館することといたします。また、金曜日に実施してきた夜間開館を土曜日にも広げて、週末の美術鑑賞により多くの機会をご提供できるようになりました。どうぞお友達やご家族をお誘い合わせの上、夜 8 時までゆっくりと館内でお過ごし下さいますように。

開館の日時を延長すると同時に、本年度から小・中学生の入館料をすべて無料にさせていただきます。明日の日本を背負う少年、少女たちに、豊かな感性を磨き、育ててもらうことは、私たち大人の期待するところであり、願うところです。市の美術館が幼い頃から身近な存在となってくれるように、彼らにも親しみやすい展示を心がけていきたいと思えます。

本年度の展覧は、「戦後日本デザインの軌跡 1953-2005」という企画展（4 月 1 日—5 月 28 日）から始まります。副題に「千葉からの挑戦」とあるように、地元千葉大学工学部工業意匠学科の出身者たちによるデザインを集めたものです。同学科卒業生の日本デザイン界における活躍と実績にはめざましいものがあり、戦後の産業界に大きく貢献してきました。自動車やカメラ、時計や家電製品、化粧品やお菓子などの商品に加えて、インテリアや広告など多分野、多方面の展示作品に、これも、あれも見慣れたもの、懐かしいものと、驚かれることでしょう。人はとかく足下に目が行き届かないものですが、千葉の誇るべきデザイナーたちの創造的な活動の軌跡を確認していただく、絶好の機会となることでしょう。

千葉市美術館は、まずは千葉、房総に関連する美術への親しい注視に始まり、日本、そして世界の美術へと視野を広げていく必要があります。また、昔から今、過去から未来へとという、時間軸にも奥行きと広がりをもたなければなりません。その意味でも、本年度の企画展、所蔵作品展は充実したものとなるはずで



「戦後日本デザインの軌跡展」展示風景

初夏は「海に生きる・海を描く～応挙、北斎から杉本博司まで」、夏休みの時期には「イギリスの美しい本」と「スターよ永遠に 追善浮世絵展」の二本立て、秋の初めは当館が得意とする浮世絵関係の「東海道五十三次・木曾街道六十九次～広重 二大街道浮世絵展」と「江戸の医学書や健康浮世絵って、どんなもの?」、秋の終わりの頃には「東洋のゴッホ」とうたわれた江戸時代の文人画家浦上玉堂の企画展も予定されています。

「浦上玉堂展」とほぼ並行した時期に開かれる「美術館ボランティアが選ぶ 千葉市美術館コレクション展」も新しい試みとして大いに期待されます。学芸員とは異なる、市民を代表しての新鮮な切り口で、どのような展示が実現されることでしょうか。思いっきり大胆に、意表をつくアイデアの模索と検討が、ボランティアの皆さんの間で今からすでに始まっているようです。

年末からお正月にかけては、「草間彌生とニューヨークの日本人作家」および「サトウ画廊 1955-1981 若く、熱い日々」と題する二部立ての所蔵作品展、そして 1 月から 2 月にかけては、「幕末に活躍した郷土の画家」とサブタイトルをつけた「鈴木鷺湖展」、さらにお待ちかねの「竹久夢二展」が併せて同時に開催されます。

以上、多彩なメニューを取りそろえて、本年度も皆様のにぎにぎしいご来場を、館員一同とともに心からお待ちしております。

そうそう、言い忘れましたが、ミュージアムショップも、夏のはじめ頃には展示場に近い 7 階に新装開店いたします。こちらの方もごひいき、お引き立てのほどをお願い申し上げます。

館長 小林 忠

# 戦後日本デザインの軌跡 1953-2005

—千葉からの挑戦



fig.1

## 1 1953-60年／出立やいま

戦後の混乱がようやく収まり、日本の復興が実質的に始まるのが1950年代。デザインの世界でも、代用品や外国製品のコピーにとどまらない日本オリジナルの造形が登場して来ます。1951年にアメリカ視察から帰国した松下幸之助が「これからはデザインの時代や！」と言いつつ放ったというのは有名な話ですが、その「デザインの松下」を確立した真野善一による家電製品 (fig.1) や原付の超ロングセラーとなった〈ホンダスーパーカブ C100〉 (fig.2) には、機能に徹しながらも形の洗練を志向する強い意志が感じられます。また矩形と真円との組み合わせが印象的なラジオ〈TR-610〉 (fig.3) は、かつてない薄さと小ささを実現してソニーの名を世界に知らしめました。1950年代のデザインにはいずれも新時代の初々しさがあり、また材質や塑性の制約が多いゆえか思いがけずミニマルでモダンなデザインが実現しているのも興味深いところです。

## 2 1961-65年／地歩を固めて

1960年代前半は、64年の東京オリンピック開催に向けてインフラが急速に整い、製造技術も大躍進したいわゆる高度経済成長の時代です。モノは「作れば売れる」と言われ、大量の家電や日用品が世に出ましたが、そのひとつが今もおなじみ〈ポリバール〉 (fig.4)。「ゴミの日」に各家庭からゴミを持ち寄る新システムの導入に伴い、それまでの不衛生な常設ゴミ箱に替わって開発された製品でした。ポリエチレン成形による水色の容器は軽くて丈夫だけでなく、流通・輸送のためのスタッキングにも配慮がなされています。デザインが「日常」の快適性に貢献した一例といえるでしょう。対照的に「夢」への挑戦といえるのが同年の〈パブリカ UP10-D〉 (fig.5) です。通産省の「国民車構想」を受けて開発されたもので、「パブリカ」とは「パブリック・カー」の略称でした。高性能と低価格を体現したシンプルなフォルムは、小型車の原点として今なお色あせない魅力を放ちます。

## 3 1966-70年／成長と拡散

1960年代後半、日本製品はその安定した高品質が世界で広く認められるようになり、経済成長は続きました。好景気を背景に国内の文化は多様化し、デザインの対象も広がりました。〈『科学』『学習』教材付録シリーズ〉 (fig.6) は日本初のデザイン会社 KAK が手がけたもの。学校やPTAを巻き込み、流通方法までも開拓して実現させた事業でした。顕微鏡やカメラ、薬品セットや計器など、プラスチックを多用した教材の数々は子供をターゲットにしながら精巧そのもの。一時は全国の小学生の50%以上が購読していたという空前絶後のプロジェクトでした。〈エムジー5化粧品〉 (fig.7) は、黒と銀の市松模様や人気俳優を起用したテレビCMをご記憶の方も多いことでしょう。ここではパッケージはもはや中身を飾るための衣装ではなく、それ自体がひとつの価値となっています。デザインの良し悪しが企業全体のイメージを左右する、新たな時代の到来です。

2006年度の企画展第一弾は、デザインがテーマです。千葉大学工学部工業意匠学科の出身者たちによる作品から、戦後日本のデザイン史をたどります。

千葉大学工学部は、1922年に東京芝浦で開校した工業圖案家養成学校、東京高等工芸学校を前身とします。同校が1949年に千葉大学の一学部となり、64年に西千葉へ移転して今に至るのですが、全国的にもきわめて早い時期からデザイン教育に着手し、戦後の経済復興期から高度成長期にかけて多くの優れたデザイナーたちを送りだしてきました。今回の展覧会は千葉大学工学部工業意匠学科の卒業生たちが手がけた自動車やインテリア、カメラ、パッケージ、公共サインなど私たちの生活に身近なデザイン約400点から構成されています。展示の組み立てにそって、出品作品の一部とその時代背景をご紹介します。



fig.2



fig.3



fig.4



fig.5



fig.6



fig.7





fig.8



fig.9



fig.10



fig.11

#### 4 1971-80年／日本の個性

1970年の大阪万博と73年の京都における世界デザイン会議を経て、ジャパニーズ・デザインは真に世界に伍することになりました。オイルショックや公害問題の頻発はそれまでの「消費は美德」から「省エネルギー」へと思考を転換させ、デザインもミニマルなものへと向かいますが、それは日本製品が最も得意とするところでもあったのです。1979年の〈ウォークマン TPS-L2〉(fig.8)は、テープレコーダーからスピーカーと録音ヘッドを外すという奇抜な発想が大ヒットにつながった製品。その潔い形の魅力とともに、音楽を享受するスタイルをまるごと変えた「事件」でした。現在につながるものとしては、〈営団地下鉄サインシステム〉(fig.9)も1970年代の作品です。見通しの悪い空間で人が快適に動けるよう、各路線を色の輪で象徴させて表記を統一する手法は今では当たり前ですが、当時は画期的なものでした。今回は展示室の一面に地下鉄駅の一部を再現しています。

#### 5 1981-90年／過剰な繁栄

1980年代といえば、未だ記憶に新しいバブル景気の頃。情報のやりとりだけで巨額の動く時代にモノは溢れ、デザインはマイナー・チェンジを繰り返す混沌とした状況に追い込まれました。そのなかで今に残るカメラ二種をご紹介します。ひとつは〈コニカ Big mini〉(fig.10)。機能を絞ることで「世界最小・最軽量」を実現、凸凹のないフラットな形は携帯性に優れ、カメラの小型化・軽量化の流れを決定づけました。「Big mini」というキャッチーな名前もロングセラーに貢献しました。もうひとつは〈オリンパス 0-product〉(fig.11)。〈Big mini〉とは対照的なアート志向のカメラです。「O」はオリンパスの頭文字であると同時に「ゼロ」—カメラの常識を捨ててゼロから発想することを意味します。なるほど個性的な外見ですが、ありきたりな形では満足できない多くの人を魅了しました。同じ時期に発表されたふたつのカメラから、すでに私たちの価値観がいかに多様化しつつあったかがわかります。

#### 6 1991-2000年／停滞と回復

バブルの破綻と再建の1990年代。日本製品が世界で戦うための武器として、デザインは改めてその重要性を認識されることになりました。そして最新のデジタル機器を装うと同時にヒューマンな要請にも応えるという、両極の課題をつきつけられたのです。対象はモノからコトへと広がり、人や地球に優しいデザインが求められました。たとえば〈光るチャイム〉(fig.12)は、耳の不自由な人にも使いやすい光と音で知らせるチャイムです。従来の報知器とは異なり、周囲に溶け込むスタイリッシュなデザインです。また〈CEU〉(fig.13)は、環境を考えた自然派洗剤シリーズの容器。使用後は小さくたたんで捨てることができ、素材もリサイクルしやすいものが選ばれています。

#### 7 2001-05年／今がその時なのか

そして2000年代。ハイブリッドカー〈トヨタプリウス〉(fig.14)の躍進に象徴されるように、グローバル化の大波にさらされつつも、日本は今や自動車生産で世界一になろうとしています。その一方でデザインは、小型化や軽量化の先にあるものを探しあぐねているようにも見えます。この章ではデザインの言語が出尽くしてしまったかに感じられる今、デザイナーたちがどのような挑戦を続けているのかをご覧くださいと思います。

この展覧会は、当館と同じ千葉市に位置する千葉大学の全面的な協力のもと実現しましたが、ローカルな展覧にとどまらない、日本のデザイン史を通覧していただける内容です。1950年代から現在までの各時代を象徴する懐かしくも新しいカタチの数々は、生活史や経済史などさまざまなことを物語ってくれるでしょう。モノに特別執着する人でなくとも、手にしたモノにまつわる記憶は意外に身体深く浸透しているものです。会場で忘れていた記憶がよみがえったり、予想外の発見があるかもしれません。土曜講座やワークショップなどイベントも盛りだくさんですのでみなさまお誘い合わせのうえぜひご来館ください。

学芸員 西山純子



fig.12



fig.13



fig.14

- fig.1 〈卓上扇 20B1〉 真野善一／1952年／松下電器産業／山鬼文庫蔵
- fig.2 〈ホンダスーパーカブ C100〉 1959年／本田技研／ホンダコレクションホール蔵
- fig.3 〈トランジスタラジオ TR-610〉 山本孝造＋五十嵐忠＋鹿井信雄／1958年／ソニー／THE CORRUGATE SHED 蔵
- fig.4 〈ホリベール〉 大関幸威他／1961年／積水化学工業／積水ライフテック蔵
- fig.5 〈パブリカ UP10-D型〉 長谷川龍夫＋辺見邦三郎＋渚徹／1961年／トヨタ自動車工業／トヨタ博物館蔵
- fig.6 〈[科学]・[学習]教材付録シリーズ〉 KAK／1960年代～2000年代／学習研究社／松丸武蔵蔵
- fig.7 〈エムジー5化粧品〉 青木茂吉＋藤代栄三郎＋杉浦俊作／1967年／資生堂／資生堂企業資料館蔵
- fig.8 〈ウォークマン TPS-L2〉 黒木靖夫／1979年／ソニー／THE CORRUGATE SHED 蔵
- fig.9 〈営団地下鉄サインシステム (標準型)〉 1973-2003年／黎インダストリアルデザイン事務所蔵
- fig.10 〈コニカ Big mini〉 井口竹喜／1989年／コニカ／コニカミノルタブラザ蔵／井口竹喜蔵
- fig.11 〈オリンパス 0-product〉 浅賀武／1988年／オリンパス／オリンパス技術歴史館蔵
- fig.12 〈光るチャイム EC170P〉 山内勉／1997年／松下電器産業／山内勉蔵
- fig.13 〈CEU〉 伊藤透＋堀川穰＋佐藤卓／1997年／エフティー／資生堂／伊藤透蔵
- fig.14 〈トヨタプリウス〉 岡本浩志／2003年／トヨタ自動車工業／トヨタ自動車工業デザイン部蔵 (展示は1/5スケールモデル)

### 戦後日本デザインの軌跡

#### 1953-2005 —千葉からの挑戦

2006(平成18)年4月1日(土)—2006(平成18)年5月28日(日)

10:00—18:00 金曜日・土曜日は20:00まで

\*入館受付は閉館の30分前まで

【休館日】5月1日(月)

【入館料】 一般 800(640)円

高校・大学生 560(450)円

小・中学生 無料

\* ( )内は団体30人以上の料金

## 戦後日本デザインの軌跡展 関連イベント

◆デザインを語る土曜講座 ◎いずれも午後2時より11階講堂にて・先着順に150人まで受付（入場無料）

- 4月29日 吉田光利（花王株式会社パッケージ作成部 部長）「普段はきけないパッケージ・デザインの話」  
5月6日 井磧伸介（テレビ朝日技術局美術制作センター デザイナー）「テレビ番組の舞台裏お見せします—美術デザインの話」  
5月13日 山内勉（松下電工株式会社デザイン部・社団法人日本インダストリアルデザイナー協会）「生活を創るデザイン—家電と暮らしの進化論」  
5月20日 石崎弘文（ダイハツ工業株式会社デザイン部 部長）「私のためにデザインした車—ダイハツコペン」  
5月27日 宮崎清（千葉大学理事・副学長）「文化をつくるデザイン—千葉からの挑戦」

◆ワークショップ ◎いずれも中学生以上対象・定員20人・参加費1,000円・午後2時より11階講堂にて

- 5月7日（日） 「これが私のシンボルマーク」講師：宮崎紀郎（元千葉大学工学部 デザイン工学科教授）  
→あなたのチームやあなたのお店、そしてあなた自身のオリジナルシンボルマークを作ってみませんか？  
5月21日（日） 「変形多面体のパッケージ—きれいなカタチのギフトボックス」講師：丸山和子（丸山和子デザイン事務所）  
→どこから見てもカタチの違う、あなただけのギフトボックスを作ってみませんか？

◎参加ご希望の方は、往復葉書に住所・電話番号・氏名・年齢・性別・人数（お二人まで）どちらのワークショップかを明記し、千葉市美術館「デザイン展ワークショップ」係までお申し込みください（締切は4月28日必着・応募多数の場合は抽選）。

◆ギャラリートーク ◎いずれも午後2時より・チケットを持って8階展示室入口にお集まりください

- 5月5日（金・祝）／担当学芸員  
毎週水曜日／美術館ボランティアスタッフ

## 第二期ボランティアさんのデビュー

昨秋に募集を行なった美術館ボランティア二期メンバーは、美術館での専門研修6回を終え、あとは夏に予定されている、生涯学習センターでの研修（他の施設ボランティア研修生と合同）を残すのみとなりました。ちょうど折り返し地点となりますが、4月からは現場での研修という意味も込めて、現メンバーとともに美術館での活動に少しずつ参加します。ご来館のみならず展示室でお会いする日も、もうすぐです。

千葉市美術館でのボランティア活動は、スタートして3年、まずはお客様を展示の世界へ誘うギャラリートークに始まり、小中学生の団体を少人数グループで引率する鑑賞リーダー、ワークショップや関連事業でのサポートと、活動範囲を広げてきました。2005年の年明けには、所蔵作品展の図録づくりや展示作業にも参加しました。

新しいメンバーを迎えた今、さらに活動の範囲を広げ、ボランティアならではのユニークな試みも期待できるのではないのでしょうか。まさに、十人十色だからこそおもしろい美術館ボランティア活動。美術館と市民の皆様とをつなぐ役割として自分たちにできることは何か、30人を越えるメンバーが、それぞれの思いや得意なことを尊重し合いながら、今まで以上に元気づく、生き生きと活動していってほしいと思います。

学芸員 山根佳奈

## ボランティア日和 episode 10

千葉市美術館ボランティアをはじめ、4回目の春を迎えました。「え〜っ、もう3年も経ったなんて……」これまでの活動を振り返っての一番の感想です。

3年前の今頃、初めてのギャラリートークの体験に必死の思いでした。それが、このように続けられるとは……。お客様の前にはじめて立った時、最初の一言が出ませんでした。傍らに立つ学芸員氏の「本日のボランティアさんをご紹介します〜」の言葉に本当に助けられました。そして、何よりも、展示室に並ぶ作品の魅力に引かれ、多くの方々に、この感動をお伝えできればとの思いが背中を押し続けてくれました。しかし、常に悩むのは、作者の思い・展示企画者の意図を理解・消化し、自身の感動も合わせ、どれだけ来館者の方々に適切な表現でお伝えできているかという点です。

また、一般向けのギャラリートークだけでなく、小中学生対象の鑑賞リーダーも大きな活動のひとつです。作品理解だけではなく、美術館という空間にいることの楽しみ、作品と心の中で会話する喜びをほんの少しでも感じてもらえれば……と願っています。しかし、現実には厳しい…。特に、思春期を迎えた中学生達は、皆、感情表現を抑え気味です。自身の十代の頃（遥

か昔）を思い出しつつ、どう意思疎通を図るのか、オバサンの悩みは続きます。

この二つの活動に加え、今年度は、初めて、展示作品の選定からボランティアが参加する、「美術館ボランティアが選ぶ千葉市美術館コレクション展」が、秋に企画されています。果たして、お客様に満足していただけるものができあがるのか、ハラハラドキドキの思いです。

二期生も加わり、この春、千葉市美術館ボランティアは、新たな一歩を踏み出しています。どうぞ、皆様、美術館をご一緒に楽しみましょう。

美術館ボランティア 中村しのぶ



「ボランティアが選ぶコレクション展」の作業風景



# 海に生きる・海を描く ～応挙、北斎から杉本博司まで～

## — 日本美術において海をテーマにした作品として想像されるものは何か、ということなど —

少し前まで、チバテレビで「ファイト！ファイトちば」というキャンペーンCMが放映されていた。簡単に云ってしまえば、この千葉をもっと元気に盛り上げよう、という意図だった（関係者の方々、間違っていたら申し訳ありません）。

このキャンペーンCMには昨年、歌手のマイク真木さんが出ていて、「千葉はいいところですねえ、三方を海に囲まれているんですね」と云っていた。確かに房総は半島だから三方を海に囲まれているのであって、周囲がぐるりと海だったら島である。マイク真木さんは暖流がぶつかるこの房総半島と、以前住んでおられたハワイを重ね合わせていたのだろうか。

さて、今回の所蔵作品展は海に生きる人々や、海を描いた作品を集めてみた。ちょうど、展覧会最終日は「海の日」にも重なる。

作品を拾い出してみても意外なことに、葛飾北斎（1760-1849）による有名な《富嶽三十六景 神奈川沖波裏》（今回は前期展示）や、《千絵の海 総州銚子》（後期展示）などは思い出せるし、漁師や海女が描かれた作品はあるけれども、北斎以外の作品で、海そのものがテーマになった作品がどれだけあったのか、すぐには思い出せなかった。

「日本は海洋国家ながら、海を主題として描かれた作品は意外と少ない」。

こう語ったのは当館の小林館長である。館長によれば、江戸時代の琳派の屏風などでも海を描いた作例はあるにはあるけれども、それは珍しい例だとのこと。ならば、さまざまな海のありようを描いた北斎は、例外的な存在だということになる。もっとも、北斎はレオナルド・ダ・ヴィンチ（1452-1519）同様、海に限らず川や滝など、自然界における「水」の表情を描くことにこだわった画家だったのだが。

太古から、日本人にとって「海」とは海産物などを人間に与え、恵んでくれる場所であると同時に、陸から見える水平線の先は「異界」そのものだった（これは、ヨーロッパにおける「森」と同じ）。

「異界」のひとつの例が、かつての日本にあった、「補陀落渡海（ふだらくとかい）」という仏教の信仰に基づく行為である。即身成仏の海洋版、とでも云ったら良いか。外から釘を打たれた小舟にわずかな食物とともに旅立つ、決死の船出だった。目指すは、南方海上にあると言われた観音の浄土。地球上の生命が海から誕生したことを思えば、「あの世」である海に還ろうとする行為は人間の深層にある本能なのだろう。この事例を考えると、（舟を棺にした例は洋の東西を問わず存在しているにもかかわらず）日本美術で海を描いた作品が意外と少ない理由も少しばかり理解できる—日本人はどうもリアルな地獄絵は得意なくせに、極楽図となるとどうも通り一遍な表現ばかりになってしまうことと似た理由が働いているに違いない。

ところが、こちらへんがちゃっかりしているというか、陸と異界である海の接点であり、「彼方＝異界（国）」からやって来た船を迎え入れる装置としての港は、近世絵画でもいい題材になっている。日常と非日常の境が港である、こう言い直すこともできる。安土・桃山時代の南蛮屏風や、江戸時代の長崎にあった出島を描いた作品（今回の展覧会でも川原慶賀による《長崎港図》が後期に展示される）などは、美術というか歴史の教科書でご覧になった方々も多いはずだ。当時のひとつとは、描かれた港を跳躍台にして自らの想像を彼方へと羽ばたかせていったのだった。

近代になると、各地で海を題材とした作品が制作されるようになった。その多くに共通する性格は、実は南蛮屏風や出島の絵といくぶん似た非日常の気分、「旅情」ということばに集約される感覚に支えられている。

戦前の千葉市に住み、数多くのテンペラ画を遺した無縁寺心澄（1905-45）の作品には市内から見た海を描いた作品などが多数あるものの、筆者が見るところ海を描いた彼の作品には、ここが千葉ではないような、自分がフランスかどこかでラウル・デュフィ（1877-1953）のように絵筆を軽快に走らせている、そう思いたい—という気分がかなり強く表れている。彼の風景画のなかで人間がはっきり描かれた例は少ない。これは人間を描いてしまうと、彼の夢が破られてしまうからだ。心澄はフランスに憧れた近代日本の画家のかなり典型的な例である。

話題を変えよう。明治以降には風光明媚な外房に油彩画家たちがやって来て、海を舞台とした二点の名作が制作されている。青木繁（1882-1911）の《海の幸》（1904：石橋財団ブリダストン美術館蔵）と安井曾太郎（1888-1955）の《外房風景》（1931：大原美術館蔵）である。近代日本洋画のなかでも屈指の名作に数えられるこの二点が、房総に育まれた作品であることを千葉県民たるもの誇りに思ってくれ、いずれも県外の美術館が所蔵していることは悲しむべきであろう。

その反面—これは半ば真面目に、半ば冗談として受け取っていただきたいのだけれど—外房に来て青木や安井のように成果を挙げた例は少ないこともまた、事実である。やはり、東京から画家たちが画になる材料を探しにやって来ても、彼らとて釣られたばかりの魚や鮑などを食べるのが楽しみだったりするわけで、勉強するぞと云いながら遊んでしまう学生たちと同じだったのだ。しかも、近代の画家たちはそのような誘惑に弱い人間が、結構多かった。 学芸員 藁科英也



森田恒友《日本風景版画 第五集 天草之部三、牛深港》1917（大正6）年

## 海に生きる・海を描く

### ～応挙、北斎から杉本博司まで～

2006（平成18）年6月3日（土）—2006（平成18）年7月17日（月・祝）

\*江戸時代の絵画は6月25日（日）までを前期とし、翌26日（月）以降を後期として展示替えを行います。

10:00—18:00 金曜日・土曜日は20:00まで

\*入館受付は閉館の30分前まで

【休館日】6月5日（月）、7月3日（月）

【入館料】 一般 200(160)円  
高校・大学生 150(120)円  
小・中学生 無料

\*（ ）内は団体30人以上の料金

## 今年度の展覧会スケジュール

7.22 (土) —8.27 (日)

### イギリスの美しい本

世界三大洋書と呼ばれる工芸品のような書物を生み出した、ウィリアム・モリスらによるプライベート・プレス運動。その成果を中心に、イギリスで愛されてきた美しい本の歴史をたどります。ロンドンの製本装丁家協会「デザイナー・ブックバインダーズ」の新作も紹介。



ケイト・グリーナウェイ〈窓の下で〉  
1878年 栃木県立美術館蔵

7.22 (土) —8.27 (日)

### スターも永遠に 追善浮世絵展

江戸時代後期～明治にかけて、歌舞伎役者が世を去ると、その姿を表して、死去を報じる浮世絵版画「死絵」が出版されました。江戸文化研究で有名な林美一氏旧蔵品を中心に、スターへの熱狂が伝わる「死絵」を展示します。



歌川国芳〈八代目市川團十郎の死絵〉  
嘉永7年(1854)

9.5 (火) —10.9 (月・祝)

### —東海道五十三次・木曾街道六十九次— 広重 二大街道浮世絵展

歌川広重の代表作であり、浮世絵街道物の二大傑作といわれるシリーズを一堂に会する展覧会です。特に溪斎英泉と共作した「木曾街道六十九次」は、世界最高のコンディションを誇るセットで、新発見の2図も出品されます。



歌川広重〈木曾街道六十九次之内 洗馬〉天保期(1830-44) 個人蔵

9.2 (土) —10.29 (日)

### 江戸の医学書や

#### 健康浮世絵って、どんなもの？

千葉大学図書館亥鼻分館には、最新の医学書・薬学書ばかりでなく、江戸時代に刊行されたものも多数所蔵しています。その中から、絵入りの医学書・本草書や、病気・身体・健康に関するものを題材とした浮世絵を展示します。



〈婦人良薬〉月さら系(薬の広告) 明治期 千葉大学図書館蔵

10.17 (火) —12.3 (日)

### 美術館ボランティアが選ぶ 千葉市美術館コレクション



第2期のスタッフを含め、18年度からは30余人のボランティアの皆さんが美術館で活動する予定です。その方たちが、プランを立てて作品を選定し、学芸員と協働で作りに上げる展覧会です。

東洲斎写楽〈三代目大谷鬼次の江戸兵衛〉寛政6年(1794)

11.3 (金・祝) —12.3 (日)

### 浦上玉堂展

江戸時代、武士の身から脱藩して各地を遍歴、詩書画琴に親しむ自娛自適な生活を送った最も文人らしい文人、浦上玉堂(1745-1820)。代表的な書画作品はもとより、彼が愛した七絃琴など関連資料を含む約150点でその全貌を紹介します。



浦上玉堂〈山高水長図〉文化9年(1812)頃  
岡山県立美術館蔵

12.11 (月) —1.14 (日)

### 第1部 草間彌生とニューヨークの日本人作家



草間彌生〈最後の晩餐〉1981年

草間彌生を中心に、荒川修作や篠原有司男など、1950年代末以降アメリカに渡り、ニューヨークで活躍したアーティストの作品を展示します。

### 第2部 サトウ画廊 1955—1981 ～若く、熱い日々～

全国の若い芸術家たちが銀座にある一軒の画廊に集い、芸術や夢を語り合った日々を、当館に寄贈されたサトウ画廊のコレクションによって実感して下さい。



池田龍雄〈化物の系譜シリーズ 仲間〉1955年

1.20 (土) —2.25 (日)

### 竹久夢二展

メランコリックな女性像や愛くるしい童画、斬新なデザインなどで今もなお人気の高い竹久夢二。その代表作約200点から、芸術の絶対的な自由を体現した近代のマルチ・アーティスト、竹久夢二の全体像に迫ります。



竹久夢二〈宝船〉大正9年(1920)



1.20 (土) —2.25 (日)

### 鈴木鷺湖 幕末に活躍した郷土の画家

鈴木鷺湖(1816-1870)は下総金堀村(現在の船橋市金堀町)に生まれ、谷文晁の画系に連なる画人として活躍しました。本展覧会は石井柏亭・鶴三兄弟の祖父にあたる鈴木鷺湖の画業を本格的に紹介するはじめての試みです。

鈴木鷺湖〈干公高門図〉慶応2年(1866)

3.3 (土) —3.23 (金)

### 第38回千葉市民美術展覧会

市民芸術祭の一環として、千葉市美術協会会員および公募入選作品約1000点を、7部門に分けて展示します。

\* 2006年3月時点での予定です。都合により展覧会名、日程、展示物の一部が変更となる場合がございます。

# 春から千葉市美術館が変わりました！

## ｜開館時間｜

月曜日—木曜日・日曜日 午前10時～午後6時  
金曜日・土曜日 午前10時～午後8時  
(入館は閉館の30分前まで)

## ｜休館日｜

毎月第1月曜日  
年末年始(12月29日～1月3日)  
展示替え期間

## ｜観覧料｜

所蔵作品展  
一 般 200円(160円)  
高校・大学生 150円(120円)  
小・中学生 無料

- \* ( )内は団体30名以上の料金
- \* 企画展の入場料は別に定めます。
- \* 小・中学生は企画展も無料です。

## ｜友の会｜

年会費2,000円(入会金1,000円)で、展覧会を1年に何度でも観覧できるほか、展覧会図録の割引など数々の特典を受けられます。特典は申し込み当日から適用されます。

\*詳しくはtel.043-221-2311へお問い合わせください。

## ｜貸し出し施設使用料｜

	10:00-13:00	13:30-17:00	17:30-21:00
多目的ホール(1F)	6,480円	7,480円	7,480円
講堂(9F)	1,520円	1,770円	1,770円
講堂(11F)	3,960円	3,960円	3,960円

市民ギャラリー 各室1日につき9,170円(1週間を単位として貸し出します。)

\*詳しくはtel.043-221-2311へお問い合わせください。



- ◎ JR千葉駅東口より  
・徒歩約15分
- ・千葉都市モノレール県庁前方面行「葭川公園駅」下車徒歩5分
- ・バスのりば7番より大学病院行、または南矢作行にて「中央3丁目」下車徒歩2分
- ◎京成千葉中央駅東口より徒歩約10分
- ◎東京方面から車では京葉道路・東関東自動車道で宮野木ジャンクションから木更津方面へ貝塚ICで出て国道51号を千葉市街方面へ約3km 広小路交差点近く
- ◎地下に駐車場があります。

【編集・発行】千葉市美術館 〒260-8733 千葉市中央区中央3-10-8  
TEL. 043-221-2311 FAX. 043-221-2316

Chiba City Museum of Art  
3-10-8 Chuo, Chuo-ku, Chiba 260-8733 Japan  
<http://www.cema-net.jp>

【発行日】2006年4月26日

【印刷】株式会社プリンテックメディア